

平成 21 年度 京都府立大学地域貢献型特別研究 (ACTR) 成果

分類 番号	A7	取組 名称	過疎化・高齢化の進んだ農村集落の維持・再生に関する研究
研究代表者：生命環境科学研究科		教授：宮崎 猛	
研究担当者： 京都府立大学（東 あかね、中村 佐織、宗田 好史、中村 貴子（敬称略）） 外部分担者・協力者（深町 加津枝氏、秋津 元輝氏、中村 治氏 田淵 功氏 ほか）			
主な連携機関（所在市町村、機関（部署）名） 京都府、京都府宮津市企画調整室、			
【研究活動の要約】			
2008年から2009年にかけて、京都府宮津市世屋地区と日ヶ谷地区で、京都府立大学と地域とが連携をして、地域の活性化について共に考え、行動してきた。2008年度には、地域活性化計画をたて、加工食品づくりや、新特産農産品づくりなどがすすむこととなった。2009年度には、過疎化・高齢化が進む農村で、その生活様式および農業をはじめとする地域産業の実態を明らかにすることを第1の目的とし、京都府農村振興課が推進するふるさと共演活動を実践するとともに、その評価、携わった学生からのヒアリング調査、シンポジウムの開催において、公開討論の場を設定した。			
【研究活動の成果】			
全国的に地域住民のうちの50%以上が65歳以上という集落（限界集落）が増えており、府内には141集落（府内の8.3%）もある。一方、農村地域には多面的機能のあることが指摘されており、農村は国民的財産といえる。農村を維持する力をソーシャルキャピタルという。宮津市ではソーシャルキャピタルの弱体化対策として、5集落を1単位とする旧村単位で地域づくりに取組始めている。旧村の単位は谷筋を同じくする集落ではあり、以前から住民間の交流はある。とはいうものの、地形的に集落が放射線状に広がっている日ヶ谷地区に対して、直線状に広がっている世屋地区では交流程度がやや低い。日ヶ谷地区では集落営農が存在する。一方で、世屋地区には多くのIターン者が居住する。Iターンで女性の活躍が目覚ましい。栗餅を中心に様々な地産地消の加工食品を作り出している。宮津市では、以前から祝いの食として、餅を食する習慣があり、地域内でよく売れる。日ヶ谷の食についてのヒアリング調査をしたところ、主要なJA出荷はさといも、ごぼう、小豆である。特にさといもは、今後の地域特産品として品種の特定などの研究を行なっている。この取り組みは男性中心である。これらの研究結果を踏まえて、集落の総戸数が20戸を下回る世屋地区のような過疎化・高齢化集落では、地域外（都市）の力を借りて、地域経営に必要な組織づくりや事業を仕組み、田舎暮らしを求める移住者や農業に新規参入するUIターン就農者を受入れ、徐々に住民のソーシャルキャピタルを強化することが重要であると考えられた。これに対して、日ヶ谷地区のように集落の総戸数が比較的多く、営農組合などの住民組織が活動している過疎化・高齢化集落では、内発的に住民のコミュニティビジネスを組織化して、出資や雇用、都市農村交流の手法により地域外の人的活力を注入して、活性化を図ることが課題である。			
【研究成果の還元】			
日時：平成22年2月27日（土） 場所：宮津市保健センター2階会議室 タイトル “命の里活性化シンポジウム～農村の明日を考える” 京都府・京都府立大学主催 参加者：学生、研究者、地元農家、複数の市町村行政者、京都府職員など約150名			
【お問い合わせ先】 生命環境科学研究科農業経営学研究室 職名：助教 中村 貴子 Tel: 075-703-5624 E-mail:taka@kpu.ac.jp			

参考（イメージ図、活動写真等）

ふるさと共援活動とワークショップ手法およびヒアリング調査手法による研究



図 1 ワークショップの様子



図 2 地域の食こんにゃく作り体験



図 3 農村の昼食



図 4 収穫体験および地域支援



図 5 Iターン女性が作る栗餅



図 6 女性だけの座談会方式によるヒアリング調査